

広義のラーニングコモンズを目指して

— 獨協大学図書館の現状分析
澁田 勝 ● 獨協大学図書館事務課

一 はじめに

近年、多くの大学図書館で新しい学習支援の形として「ラーニングコモンズ」(Learning Commons) (以下、LCと略) の設置が相次いでいる。LCの概念、詳細については米澤(二〇〇六年)を参照していただきたいが、「場としての図書館」と表現されることが多い。個人からグループまで多様な利用形態に対応した設備、紙、電子媒体問わず利用できる資料、PCやプリンター、プロジェクターなどの機器、それらをサポートする支援体制が備わっている場所ということになるであろうか。多様な利用環境を用意することで、これまでにならぬ新たな学びのスタイルが創出され、学生自身が主体的に学ぶ場となることが期待されている。

ただ、LCの構成要素についての研究はあるものの、必ずこの条件を満たさねばならないという定義のようなものはなく、各図書館のコンセプトしだいさまざまスタイルのLCが存在する。最近では東京大学や大正大学など、図書館外にLCを設置する大学もある。図書館に限らず大学における新たな学びの場としてLCが認識されつつあり、千葉大学で

はアカデミック・リンク・センターという新たな取り組みも開始されている。図書館関係者だけでなく、大学職員、研究者、学部生・大学院生、企業関係者などを交えたラーニングコモンズラボラトリという研究会にも注目されたい。

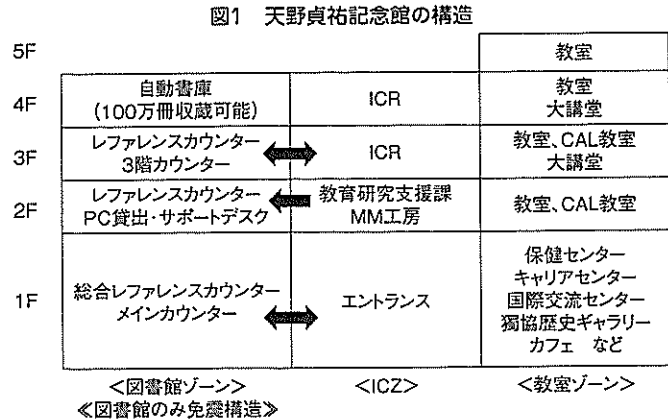
LCの構成要素、一つ一つは概念自体は従来の図書館でも検討されてきたことであるが、情報化の発達とフレキシブルな運用スタイルが許容される時代の到来により、二〇〇七年ごろからLCの設置が増えてきた。実際、本学新図書館が完成した二〇〇七年当時、LCという単語は雑誌記事の見出しにやっと出現し始めたころであった。新図書館のコンセプト作成段階ではLCという概念を追ったわけではなく、利用者にとって使い勝手の良い図書館を目指したところ、結果的にLCの機能を多く備えていた。ただ、LCというと特定の部屋や一部のエリアを指し示すことが多いが、本学の場合、広義にとらえて図書館全体をもってLCの機能を兼ね備えていると考えている。

本稿では、新図書館のコンセプトをいかに設計し、それが利用状況にどのような変化をもたらしたかを考察し、今後の課題や目指すべき将来像について言及したい。

二 「知の創造拠点」としての天野貞祐記念館

獨協大学は、外国語学部、国際教養学部、経済学部、法学部の四学部十学科、三つの大学院研究科及び法科大学院があり、学生数は約九千名である。キャンパスは埼玉県草加市の一カ所にすべて所在している。

新図書館は、二〇〇七年に創立四十周年を記念して建設された「天野貞祐記念館」に設置された。



天野貞祐記念館のコンセプトは「知の創造拠点」で、学内に分散していた図書館、外国語教育研究所、情報センターを機能統合し、大学の教育研究拠点を指すものであった。天野貞祐記念館は教室棟とも併設され、東に教室ゾーン、西に図書館ゾーン、つなぎの中央部分にICZ

(International Communication Zone) や、三つのゾーンから構成されている。教室ゾーン一階には、獨協歴史ギャラリー、カフェ、学生支援を行う保健センター、キャリアセンター、国際交流センターなどがあり、中央のICZには、高度な情報機器の利用をサポートするMM (Multimedia) 工房や語学学習をサポートする施設、ICR (International Communication Room) が存在する。また、図書館の各階に入退館ゲート(二階は入館のみ)を設けることで、これら施設との往来が簡便となり、学生に立ち寄りやすい構造とした。同時に各施設が相互に協力しやすい環境となり、従来の図書館単体では実現困難な教育研究支援を可能とし、知の創造拠点としての機能を高めている(図1)。

三 滞在型図書館を目指した新図書館のコンセプト

新図書館のコンセプト作成にあたっては、旧図書館の抱えるさまざまな問題点の洗い出しを行った。そのうえで、国内外を問わず新しい試みを行っている図書館の現地視察などを行い、什器選定や資料配置、設計の検討に至るまで図書館員をはじめ大学構成員が深く関わってコンセプトを立案した。その結果、(一)場としての図書館、(二)情報利用を促進する図書館、(三)サポートする図書館、と大きく三点を重要コンセプトと定めた。

(一) 場としての図書館

従来の図書館機能である「本を読む所」「本を借りる所」だけでなく、「作業を行う場」「居心地の良い場」へと発展さ



表1 閲覧席数の内訳 (2007年開館当時)

機器利用ゾーン	1人	PC設置席	114
		機器利用可能席	360
		研究個室	13
	複数	グループ利用席	54
		共同学習室	60
AV	AVブース	30	
	発話トレーニングブース	8	
静粛ゾーン	1人	静粛席	240
		キャレルコーナー	44
その他	新着雑誌架前		108
	貴重書閲覧室		8
	図書館情報セミナールーム		60
	その他		31
	リフレッシュルーム		
カフェ (館外)			
合計			1,130

せることとした。静かに勉強したい人、グループで勉強したい人、PCを使いたい人、個室で勉強したい人など、利用者がそのときの用途、気分です使う場所を選べるようにゾーニングを図り、多様なタイプの閲覧席を用意した(表1)。

具体的には、図書館一階から三階すべてのフロアを共通の配置とし、中心部分に開架書架を挟み、南側に静粛性を求める静粛ゾーン、北側に静粛性を求めない機器利用ゾーンを配置した。開架書架を挟むことで、それぞれのゾーンの間に物理的距離が発生し、静粛性の確保が可能となっている(図2)。

機器利用ゾーンには電源と無線LAN環境があり、ノートPCが備え付けられている席、PCを持ち込める席のほか、グループで相談しながら使えるグループ利用席や共同学習室、

した。

また、従来の図書館になかった休憩の場として、長時間滞在する利用者のため自動販売機を備えたりフレッシュルームを二階、三階に設置した。一階は図書館を出てすぐの位置にカフェが設置されており、こちらでも休憩をとることができ

(一) 情報利用を促進する図書館

インターネットが普及した環境で育ったデジタルネイティブと言われる学生たちが入学してくるにつれ、レポート作成などの学習の際、インターネット情報に頼りすぎることが問題となっている。これを解決するために、PC設置席に図書雑誌など各種資料を隣接させ、紙媒体資料の利用促進を目指した。また、資料は主題別に同一フロアに集められており、図書・雑誌の種別を問わず特定の研究テーマに関する資料は同じフロアで入手することができる。

データベースなどの電子媒体と紙媒体、PCや共同学習室などを併せて利用できる環境を設けることで、レポート作成からグループでの議論、プレゼンテーションなどを行うことができる。また各フロアにはプリンターを設置しており、授業をはじめ学習に必要な資料や作成したレポートなどを自由に印刷できるようにしている。

さらに、図書館の蔵書検索システム(OPAC)のマイライブラリー機能を使うことで、資料の新着情報の取得やブックシエルフへの文献情報の保存、資料購入依頼、レファレンス依頼など、個人ポータルとしての利用が可能になっている。

図2 各階共通のフロア配置

図書館【2F:社会科学・自然科学・工学・産業のフロア】

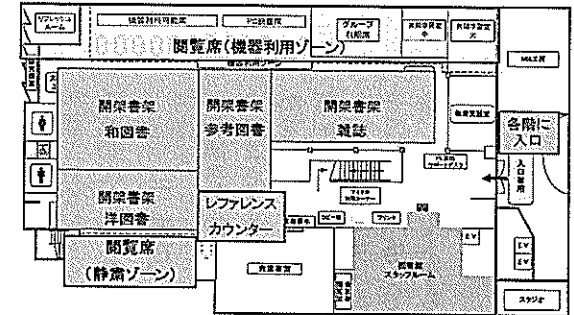
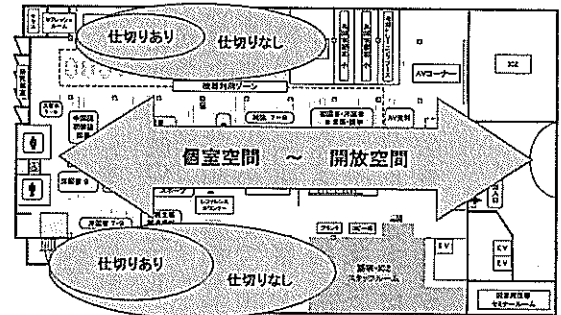


図3 空間グラデーション

図書館【3F:芸術・言語・語学・文学のフロア】



AV機器が使える席を設置した。一方、静粛ゾーンは従来ながらの静かに勉強したい人向けのエリアとなっている。

さらに両ゾーンともに、入り口に近いほうに仕切りのない開放的な席を配置し、奥に行くにつれ仕切りを増やし、個室感、静寂感が増すような空間デザインを実現した(図3)。机、椅子、カウンターといった仕器は使用するエリアや目的に応じ、それぞれの機能に合った形状、色の特注品を採用

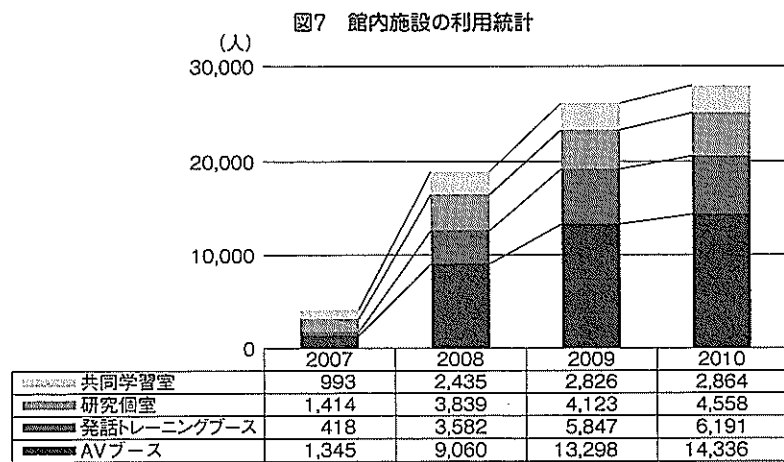
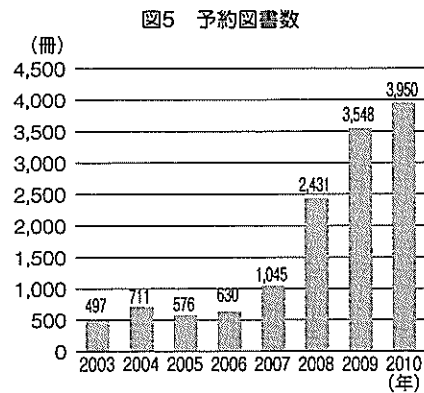
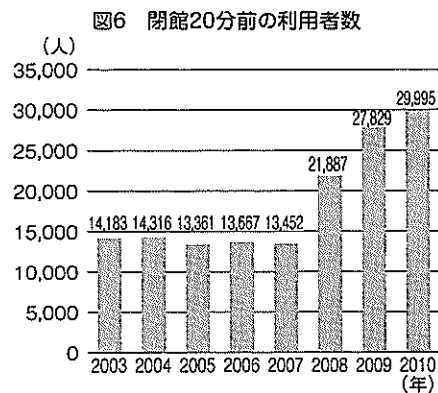
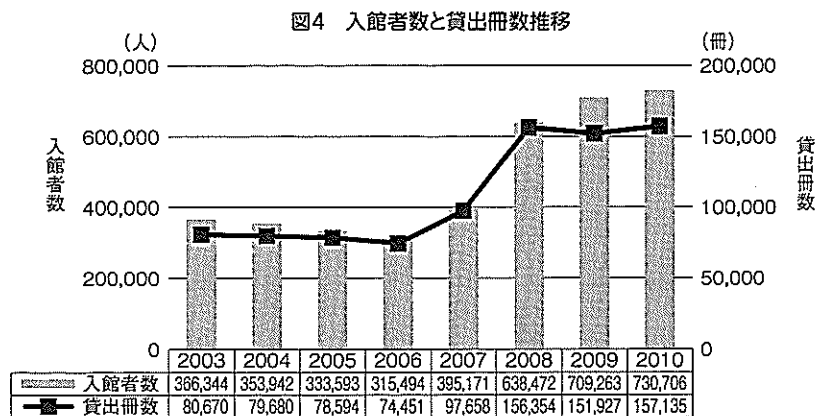
(二) サポートする図書館

学習・教育・研究支援のための人的なサポートとして、「情報リテラシー教育」が可能となる体制を準備した。

各階にレファレンスカウンターを置くことで、フロアごとの主題に対応した資料探しや資料相談などのサポートが可能となった。各レファレンスカウンターでは、資料の主題分野でグループ分けした図書館専任職員が交替で入り、利用者からの相談を受けている。完全なる専門家(サブジェクトライブラリアン)ではないものの、特定分野を専門的に担当することで職員のスキルアップにもつながり、より高度なサービスの提供を目指している。また、時間をかけた調査が必要なレファレンス質問については、主題別担当者のみならず、全専任職員で調査・回答するグループレファレンス体制で対応している。

情報リテラシー教育の拠点として、図書館内に図書館情報セミナールームを設置した。教室との併用ではなく、司書課程の一部の授業で使用するほかは図書館が自由にガイダンスを開催できるため、利用教育の計画が立てやすくなった。図書館内にあるため、図書館資料を手続きなしで持ち込むことや、講義・実習のあと、実際に図書館内を案内することもできる。CALL機能を持ち、ICTを活用したガイダンスを効果的に実施できるため、インストラクターの負担を軽減することが可能となった。

そのほかにも、他部署との隣接配置によって生まれたサポート体制の充実が挙げられる。その一つが教育研究支援セン



ターとの連携である。図書館二階にコンピュータの相談窓口「PC貸出・サポートデスク」が設けられた。これにより利用者は図書館にいながらにして、専門スタッフからPC操作のアドバイスを直接受けられるようになり、図書館側もPC関係の問い合わせに忙殺されることがなくなった。なお、ノートPCの貸出も行っており、館外での利用のほか、館内の機器利用ゾーンでも使用することができる。

外国語教育研究所との連携も語学教育を重視する本学にとって重要であった。図書館三階には語学に関する資料・設備（AVブース、発話トレーニングブース）をそろえ、図書館を出るとすぐにICR、その先には語学学習用教室（CAL教室）へとつながっており、語学を勉強する学生にとってアクセスしやすい構造となっている。

キャリアセンターとの連携も行っており、館内に就職活動に役立つ資料を集めたコーナーを設置、キャリアセンターが配布する就職ハンドブックへ就職活動に役立つ図書リストの掲載、就職活動に特化したデータベース利用ガイダンスを共催するなど、さまざまな連携を行っている。

他部署だけでなく、授業支援において教員との連携（リゾン）も進められている。本学では新入生オリエンテーションの中で図書館ガイダンスを実施しているほか、初年次教育として全学部学科の一年生に対し、少人数によるPCを使った図書館セミナーを実施している。さらに、データベースの使い方や資料の探し方のガイダンスを授業やゼミの中で行っている。さらに、データベースの使い方や資料の探し方のガイダンスを授業やゼミの中で行っている。さらに、データベースの使い方や資料の探し方のガイダンスを授業やゼミの中で行っている。

望に応じて、アレンジしながら授業セミナーを行っている。図書館主催のガイダンス情報も教員を通じて学生に宣伝してもらおうなど、教員に図書館のサポーターとなってもらうよう、連携強化に努めている。

四 統計から見る利用状況

新図書館のコンセプトのもと、二〇〇七年九月に開館して以来、間もなく四年半を迎えようとしている。主要な利用統計を参考にしながら、本学の利用状況について検証してみた。

図4は、過去八年間の延べ入館者数と貸出冊数の推移を示したものである。新図書館になり入館者数、貸出冊数ともに増加している。移転前の二〇〇六年を基準とした場合、二〇一〇年の入館者数は約二・三倍、貸出冊数は約二・一倍と倍増している。入館者数が増えた要因としては、新図書館のある天野貞祐記念館がキャンパス動線の中央に位置し、利用者からアクセスしやすい場所になったことが大きな理由であると考えられる。またコンセプトにあるように、教室ゾーン、ICZから図書館にアクセスしやすいように各フロアに入り口を設けたことも関係しているだろう。新図書館に移るに当たり、学部生の貸出冊数の上限を十冊から二十冊へ、大学院生の貸出冊数を二十冊から三十冊へ利用条件を改善したことも理由の一つとして考えられる。

図5は、予約図書に関する統計であるが、こちらも移転以降、右肩上がりとなっている。移転前の二〇〇六年を基準と

した場合、二〇一〇年は約六・二倍と利用が急増している。要因としては、入館者数の増加に伴う利用の増加も当然関係しているだろうが、予約に必要なマイライブラリー機能の利用頻度が上がったことが考えられる。マイライブラリーは、新図書館移転時に導入した自動書庫システムを使うために必要不可欠になったことから、予約機能も気軽に利用されるようになったと思われる。

図6は、閉館二十分前(授業期間平日は二十一時四十分、土曜は十九時四十分)の館内利用者数の統計である。こちらにも移転以降、増加が続いている。二〇〇六年を基準とした場合、二〇一〇年は約二・二倍となっている。この統計は、夜遅くまで図書館に滞在する利用者が増えたことを示しており、当初意図していた滞在型図書館のコンセプトが利用者を受け入れられたことを裏づけている。

図7は、利用申し込みが必要で館内施設の利用統計である。こちらにも移転以降、それぞれ利用者数が増加しており、特にAVブースの利用者数の増加が著しい。本学では語学教育に力を入れていることもあり、AVブースや発話トレーニングブースの利用が増えていることは大変喜ばしいところである。

五 今後の課題

利用統計を見るかぎり、旧図書館と比べ入館者数や貸出冊数などは約二倍、その他の利用も大幅に増加していることから、新図書館は利用者十分に活用されていると言える。一方で新たな課題も発生している。利用形態に合わせ多様なゾ

ーニングを行ったことにより、そのエリアのコンセプトと異なる使い方をしている利用者への苦情だ。例えば静粛席での私語や携帯電話の使用などである。利用が増えた分、PCやプリンターの占有といった問題も発生している。ただ、利用者からの声について言えば、延滞資料の督促や飲食問題、空調管理についてなど、旧図書館のころと大きく変わっていない。利用者からの要望等については、引き続き検討のうえ利用環境の改善につなげていきたい。

視点を変え、他大学のLCとの比較により、本学に足りないものも見えてきた。

一点目は、学術情報のデジタル化とアーカイブ機能である。いまだ本学の所蔵する資料のデジタル公開や機関リポジトリの構築ができておらず、学内の学術情報の蓄積・発信が急がれる。学術情報の発信と研究業績の公開は、大学のさまざまな情報を把握・分析して数値化するなどし、教育や研究、学生支援、経営などに活用するIR (Institutional Research) と関係する。さらには、研究者と共に研究活動の企画・マネジメント、研究成果活用促進を行うリサーチ・アドミニストレーター (URA: University Research Administrator) という概念とも関わってくるため、大学全体として検討を進めていきたいところである。

二点目は学生協働の仕掛けである。LCの機能として人的サポートが取り上げられるが、大学院生などのTAの配置や学生スタッフによるさまざまな活動を行っている大学が増えている。対利用者サービスとしてだけでなく、学生同士が共

六 おわりに

に学び成長していく場となり、教育活動の一環としてもとらえられている。学生スタッフが図書館の身近なサポーターとなることによって、学生スタッフをハブに図書館利用者が増える効果もあるようだ。本学図書館ではいまだ学生との協働につながる取り組みがないため、今後検討していきたい。

三点目は、学生に自発的な学習を促す仕組みづくりである。職員の企画力とも関係するが、他大学では朝読書や選書ツアー、読書会、ビブリオバトルなど、さまざまな活動が行われている。これらの活動は図書館への来館の機会を生み、新たな学びの創出につながる可能性もある。来館者が増えていくこそ、ただ滞在して利用される図書館にとどまらず、利用者同士が自ら学び合い成長できる機会を提供し、図書館がアクティブラーニングの場となるようにしていきたい。

滞在型図書館に関連して、昨年三月十一日の東日本大震災当時のことにも言及したい。東日本大震災では広範な地域が被災し、多くの図書館で資料の落下や書架の倒壊などの被害状況が報告されている。免震構造であった本学図書館では、幸いにも書架から一冊の図書も落下することがなく、むしろ大学の防災対策本部が設置され、避難所として活用されることとなった。図書館の安全性が確保できることが前提となるが、図書館はさまざまな設備やコンテンツをもっているため、ハード面・ソフト面でも避難所としても適していると言える。震災以降、学内では危機管理についての再検証が行われているが、防災拠点としても図書館の存在価値が見直されている。

情報化や少子化など大学を取り巻く環境の変化が著しい昨今、職員が意思決定を行うためには、これまで以上に多様な選択肢を知り、経営的判断をするための知識や経験が求められてくる。特に大学の教育研究の拠点となりうる図書館での学びのあり方については、図書館だけではなく、大学全体として十分な検討が必要である。LCは、まさにそういった検討を行う一つのよい契機ではないだろうか。

*1 米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ」『カレントアウェアネス』二〇〇六年、二八九号、9～12ページ

<http://current.ndl.go.jp/cal603> (accessed 2012-02-17)

*2 相田美英子ほか「ラーニングコモンズの要素分析―日本における導入を前提として―」『私立大学図書館協会研究助成報告書(二〇〇九―二〇一〇年度助成)(共同研究)二〇一一年 http://www.jaspul.org/josei/houkokuku2011_seinangakuin.pdf (accessed 2012-02-17)

*3 安保昇「新館紹介 獨協大学図書館」『大学図書館研究』二〇〇八年、八三号、54～61ページ

*4 萬谷衣加 事例報告「図書館員が図書館建設に関わった」二〇〇九年度私立大学図書館協会東地区部会研究部研修 http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kenshukai/2009_30.pdf (accessed 2012-02-17)